



(個人提供写真)

Yoshihiko Ito

伊藤 喜彦

1934~2005年/滋賀県

伊藤さんは30年間にもわたって多くの個性的な粘土作品を制作しました。初期の頃から、たくさんの目玉のような突起物でおおわれた独特の作品を、毎日止めどなく作り続け、不気味なほどの迫力と、ユーモラスな味のある作品たちは、彼自身のキャラクターそのものようでもありました。後年の作品は彼自身によって鮮やかな釉薬の色付けもなされ、その独特で強烈な個性は一層きわだっていました。

若い頃の彼は、何かと制限されてしまう施設暮らしの不自由さへの不満があったようです。そんな折、日々の作業とは区別した日曜日の午後、1人の施設職員が自主的に始めた自由作陶の時間ができたのです。彼は当初から熱心に参加していました。もともと、旺盛なエネルギーの持ち主で、そのあり余るほどの激するエネルギーを何とか発散させたかった彼に、粘土造形はうまく合致したのかもしれない。施設の陶芸室の片隅に自分の居場所を作って居座り、時には途中で眠ってしまったり、その制作は他を寄せ付けない奔放さにあふれていたようです。若い頃に頻発していた施設からの逃亡癖は、老年期になってさすがになくなりましたが、独自の生活スタイルへのこだわりは一向に衰えず、施設職員も含め誰もが一目置いていました。

「鋭さとやさしさがにじみ出る彼の作品には、同時に、怒りと愛が混じり合った“毒”が含まれている」と、アーティスト田島征三氏は評しています。彼の作品が放つ、のたうつような情動に魅了される人は多く、彼は70歳で突然死去しましたが、多くの逸話と作品が残されています。(はた よしこ)



『鬼の面』2004年
陶土、釉薬
465×477×218mm



『鬼の顔(土鈴)』
1987-1990年
陶土、釉薬
496×258×392mm



『船』1994年
陶土、釉薬
267×260×530mm



Satoshi Nishikawa

西川 智之

1974年~ /滋賀県在住

西川さんの粘土造形のユニークなところは、小さな1つのカタチがくり返し増殖していき、大きな1つの集合体を形作るという方法にあります。作り始めた頃は、人や魚や果物などを面白い形で1つだけ作っていたのですが、たくさんの実がぎっしり集まった「パイナップル」の作品が褒められたのをきっかけに、彼独自のこのような造形スタイルが始まったのです。「帆船」を形作るのは水兵さんたちの集合体。「りんご」を形作るのは、なぜかウサギたちの集合体です。

彼の暮らしていた施設は、日本でも最も早い時期に滋賀県に開設された障害のある児童等の施設です。そこでは職業訓練として、傘立てや花瓶のような大きな粘土造形の技術指導にも積極的に取り組んでいました。

そのため、彼も小さなカタチをどんどん積み上げていって、大きな造形へと移行していく楽しさを自然につかんでいったのでしょう。彼は粘土に向かうと大変な集中力を発揮し、一度も休憩することなく約3~4時間で一気に大きな作品を完成させていました。小さな1つの形が元になり、どんどん増えて大きな1つのイメージを形作る面白さ。納得いくところまで、すき間を埋め尽くす。その行為そのものが、彼の心の中の何かを充足させ満たしているのかもしれない。作品からはそんな彼の心の波動が、見る者にも伝わってきます。淡い色の釉薬をかけたものや、そのまま土の色を活かしたものなど、施設の担当職員のこまやかな配慮が、造形の特長を上手く活かしています。(はた よしこ)



『うさぎのりんご』1993年
陶土、釉薬
148×187×178mm